

更新統下総層群木下層の浅海堆積システムの形成にみられるテクトニクスと堆積物供給の影響

Depositional processes of the middle - upper Pleistocene shallow marine system inferred from the Kioroshi Formation, central Japan

岡崎 浩子 [1]; 中里 裕臣 [2]

Hiroko Okazaki[1]; Hiroomi Nakazato[2]

[1] 千葉中央博・地学; [2] 農研機構・農工研

[1] Earth Science, Nat. His. & Inst., Chiba; [2] NARO(NIRE)

関東平野地域は中期・後期更新世の氷河性海水準変動に伴って内湾-陸域の消長を繰り返しながら、関東造盆地運動を受けて陸化してきた。この過程は堆積物の古環境情報（堆積システム）や火山灰から得られる時間面によって明らかにされてきている。関東平野東部の常総台地の地形面を構成する下総層群木下層や常総層は、上位層による削剥もなく広範囲に分布し、詳細な堆積システムの分布が明らかにされている（岡崎・増田，1992 など）。また、常総台地では下総層群各累層の基底面等高線の分布に基づいて、この地域の造盆地運動（鹿島 - 房総隆起帯）のブロック化が指摘されている（中里・佐藤，2001）。ブロックの境界線は、千葉 - 八街を結ぶ線、成田 - 多古線、および利根川沿いにある。この構造線の存在は下総層群木下層の基底地形などによく反映されている。

海進初期の低海面期の堆積相は基底の谷部に認められる。特に成田 - 多古線に沿う谷の河口部によく残されている。この後、海進が進むことによって外洋側には砂堆（バリアー島）が発達し、その陸側に広く内湾が形成される。この湾の海進の様子は、湾中央部に発達した潮汐三角州システム中に含まれる貝化石群集によって知ることができる。また、高海面期から海退期には外洋側には海浜平野が前進する。これらの海進・海退による堆積システムの発達の仕方は上述したブロック毎に異なる。

しかしながら、木下層には挟在する指標テフラが比較的少なく、より詳細な発達過程や地域対比の分解能は限られていた。ここでは、新たな対比の可能性もしくは層位的位置の推定の可能性あるいくつかのテフラを報告し、これらと各堆積システムの特徴から内湾域の海進と海退の特徴について考察した。その結果、同時期においてもその堆積物供給量や古地理の相違によって、地域によって海進相や海退相が形成される可能性があることが明らかされた。

文献

中里裕臣・佐藤弘幸（2001）下総層群の年代と“鹿島”隆起帯の運動。第四紀研究，40，251-257。

岡崎浩子・増田富士雄（1992）古東京湾地域の堆積システム。地質学雑誌，98，235-258。